

第4群（研究報告）

ひきこもり地域支援センターにおけるひきこもり支援の取り組みと課題

○精神保健福祉センター 主任主査 石濱かおり

小原聡子, 水本有紀, 菊田久弓, 若生リカ, 鎌田直美, 加塩涼子, 粕谷祐子, 川村典子, 武者恵

キーワード: ひきこもり, ひきこもり早期への支援, 支援体制の充実

I 目的

平成26年1月に開設した「宮城県ひきこもり地域支援センター」は、ひきこもりの専門相談機関として、ひきこもりに悩む本人と家族への直接支援と、県内のひきこもり支援体制の整備を役割としている。

相談事例の分析から、ひきこもり当事者の姿やひきこもり相談の特徴を明らかにするとともに、センターが行う相談支援の課題と今後の事業展開について考察した。

II 方法

平成27年度末までにひきこもり地域支援センターに相談のあった87事例を対象とした。初回相談票の内容をもとに、[初回来談者]、ひきこもり本人の[性別]、[初回相談時の年齢]、[初回相談時のひきこもり期間]、[ひきこもり開始年齢]、[不登校歴]等を分析した。さらに、継続支援を行った67事例については、支援後の[変化の有無]や「変化の内容」を調べ、変化が見られた事例の分析からひきこもり支援の課題を探った。

III 結果

①初回来談者は「家族のみ」が8割を超える。以前に相談歴がない29事例では、[ひきこもってから相談に至るまでの期間]が「1年未満」だったのは1割強で、「5年以上」経過しての相談が半数近くを占めた。

②ひきこもり本人の特徴では、[性別]は男性が約8割であった。[初回相談時の年齢]は20代が最も多く、平均年齢は27.7歳であった。[初回相談時のひきこもり期間]は5年以上が約半数に上った。[ひきこもり開始年齢]は高校年代～20代前半の時期が6割を占めた。[不登校歴]は約6割にあった。

③「本人来所あり」は約3割で、若年層ほど本人の来所に繋がりやすかった。来所時期は、相談初期が7割以上で、相談開始から1年以上経過して本人来所に進んだ事例は1割に満たなかった。本人が来所に同意しないために家族支援が長期化している事例では、本人支援の段階に進めずにいる現状が見て取れた。

④継続支援67事例の分析では、支援開始後に本人に変化が見られたのは38人(56.7%)であった。年齢別に見ると、10代、20代では約7割に変化が見られ、若年層で変化の割合が高かった。ひきこもり期間別では、ひきこもり開始から3年未満では8割近くに変化が見られたが、3年以上では5割以下となった。

IV 考察

ひきこもり相談の特徴の分析から、思春期～青年期の時期に躓きが生じている事例が多いことがわかった。また、支援後の変化の分析から、10～20代の若年層とひきこもり期間3年未満で変化が生じやすいという結果が出ており、「若年者」「ひきこもり早期」への支援の重要性が示唆された。

一方で、ひきこもり開始から支援機関に繋がるまでには空白期間が生じていることから、本人と家族が早期に支援機関に繋がるためのシステム作りが課題として考えられた。

以上のことを踏まえ、今後の取り組みとして、①教育機関との連携、②各圏域での相談支援体制の充実、③一般向けフォーラムの開催によるひきこもりの啓発を検討していくこととなった。

また、ひきこもり相談の充実については、家族支援から本人支援の段階に進む難しさが再確認されたことから、個々の事例に対するアセスメント能力の向上とともに、アウトリーチの実施や居場所支援の充実など、本人に繋がるための支援メニューの充実を図っていくこととした。

V おわりに

今回、示唆されたひきこもり支援の課題については今後も検討を続け、県内のひきこもり支援体制の充実に役立てたいと考えている。